

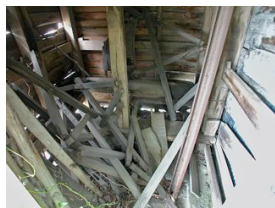
阿波國 すきま 漫遊記

— 関東からの転入者による徳島再発見 —

VOL.6 上勝の水車小屋群



上勝町福原の清井製材の産業用水車。これまで水車写真集などで紹介されたことのない隠れた名品。県内に現存する水車の中では最も立派なものひとつといっていだろう。



▲内部は搦き臼が1つというシンプルな構成。バラバラになった水輪が内部に残っていた。



▲横の沢から鉄管で水を引いて、水輪の上から注いだ。このような方式を上掛けという。

田野々の水車小屋
県道16号線に面しているので眼力があれば発見は容易だ。水車小屋のシンボルである水輪(みすず)は失われて建物だけが残っている。「岡田さんのクルマ」呼ばれ個人が所有していた水車だったという。現在は地元の人からも忘れられているようで、一〇〇mも離れていないところで畑仕事をする人に訊ねても、ここに水車小屋が残っていることを知らない人がいたほどだ。実は水車小屋を探しているとき、

本物の水車を見たことあるか？
真珠の鑑定士を育てる教育法というのを聞いたことがある。それによる一級品と二級品を並べて違いを説明するというやり方ではダメで、来る日も来る日もひたすら一級品の真珠だけを見るのだ。そうすると自然に二級品も見分けられるようになるのだという。この連載ではいづれ県内の色々な水車を紹介するつもりだが、スタートは上勝町に残る本物の水車小屋を見ることから始めたい。水車小屋とはどんな建物で、どんな場所にあるのかというありのままを見て、本物を見分ける鑑定眼を身に付けてほしいと思う。



▲水輪の中央くらいの高さから水が注がれた。この掛け方を胸掛けという。



▲水車が作られる条件は、小さくても1年中水が洒れない沢があることだ。

水車小屋を見つけるには、まず導水路・排水路があるかどうかのポイントになる。水輪は腐食しやすく、定期的な交換や補修が必要な部品だから、残っていないと思ったほうがよい。つまり水車小屋を探すには水車を探していたのではダメなのである。

下地の水車小屋
傍示の下地という集落で見かけた水車小屋。近くの農家の納屋として使われている。やはり水輪は失われているが、まだ心棒が残っている。内部の機構も残っている可能性がある。水車小屋というと、小川のほとりに茅葺きの小屋があり、豊かな水に水輪を浸しているというイメージがあるが、そういう水車小屋は非常にまれだ。実際にはトタン葺きが多いし、水車を稼働させる川は、ひとまたぎにできるような側溝程度の幅の水路があれば十分なのである。



▲現在は舗装道になっている、かつてのキンマミチ。

中瀬津の集落は川から離れていて、三〇〇mほど山道を歩かなければならなかった。集落から水車小屋に通じる道はかつてはキンマ(木馬)ミチとあって木材を運び出すたすソリのために枕木が並べられた細道だった。一度に七升から一斗の麦や米を運ぶのはお嫁さんの仕事で、重くて大変だったという。



▲内部は搦き臼×2と碾き臼×1の本格的な作り。戦時中に工兵部隊にいた人が建てたという。



▲周囲は棚田が広がるが、小屋は藪に被われていて見つけにくい。

府殿谷の水車小屋
生実の中瀬津という集落の4軒の農家が共同で利用していたという水車小屋。この上流にも2棟の水車小屋があったという。標高は五〇〇mほどあり、県内で最も標高の高いところにある水車ではないだろうか。